源氏物語「本文と享受」の方法（Ⅳ）

岩下光雄

(Ⅰ)
一、「面影」の語誌と物語の享受（Ⅰ～Ⅱ）
二、『首書源氏物語』玉鬘の巻の本文と物語の享受（Ⅰ～Ⅱ）
(Ⅲ)
二、『首書源氏物語』玉鬘の巻の本文と物語の享受（Ⅲ～Ⅳ）
三、『源氏物語の本文と享受』（和泉書院）要旨・享受をめぐる問題(Ⅰ)
(Ⅲ)
三、『源氏物語の本文と享受』（和泉書院）要旨・享受をめぐる問題(Ⅰ)　付(Ⅰ)・付(Ⅲ)
「おのがいとめでたしと」再論
「つれづれ」の語をめぐる論
(Ⅳ)
三、『源氏物語の本文と享受』（和泉書院）要旨・享受をめぐる問題(Ⅰ)　付(Ⅲ)
『伊勢物語』の方法と『源氏物語』の享受
――第一段・第二段をめぐって――

付(3)・『伊勢物語』の方法と『源氏物語』の享受

――第一段・第二段をめぐって――

I

『伊勢』「初冠」の章段は、男の「春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず」という歌と、この歌が、「みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに」という歌の趣によることを注記する二首の歌から構成されている。「みちのくの」の歌は、『古今集』巻十四、七二四番歌で「河原左大臣」（源融）の歌。角川『新編　国歌大観　第二巻』の『古今和歌六帖』三三一三番歌、『百人一首』には、これと同じ形で出ている。岩波『大系』、『新大系』、小学館『全集』、新潮『集成』、角川『新編国歌大観　第一巻』などの『古今集』は、定家本によるので、第四句が「みだれむと思ふ」となっている。新潮『集成』（奥村恒哉校注）の頭注が指摘するように、第四句の本文異同によって「やや意味が異なる」（248頁）ことになる。『伊勢』の成立、生成をめぐる問題、伝本の問題は複雑で、諸説を整理したり、批判や再検討が加えられてきたが、定説ともいうべきものを措定することは困難である。片桐洋一氏（『伊勢物語の研究』〔研究篇〕明治書院）は、第二段「西の京」の物語を「伊勢→古今」「古今→伊勢」という成立関係から「そのいずれとも決しかねる章段」（285頁）とされていた。石田穣二氏の論を批判された近著『伊勢物語の新研究』（明治書院）では、

会いは出来なかったものの、簾越しの一夜の物言いにすっかり感激し切った男がその余韻の中に漸く贈った、時間

遅れの、しかも甚だ主観的な後朝の歌とみれば、どうだろう。簡単な「古今集」の詞書よりも、「伊勢物語」第二段の文章の方が、わかりやすく、的確に、しかも過不足なく、その事情を描出し得ている　(144頁)

とされる。氏は、「「古今集」成立以前に存在して「古今集」の撰集資料になった第二段」「現存「業平集」諸本の編集時に、既に「伊勢物語」の一部となり切っていた第一段」(153頁)という物語の生成と構造論に立たれ、第二段を「伊勢→古今」という成立関係のなかにとらえている。『伊勢』第二段「西の京」は、「おきもせず寝もせで夜を明かしては春のものとてながめくらしつ」という一首の歌から構成されている。これらの歌の「出典となったもの、『伊勢物語』から取材したとおぼしきもの、およびそれらの類歌異伝の類を、集めた」(228頁)新潮『集成』附録の「伊勢物語和歌 綜覧』を引用する。

段・歌番号	歌集・作品名
初　1	古今六帖　五すりころも(三四二五) かすかのゝわかむらさきのすりころも　しのふのみたれかきりしられす 在中将集(七七) かりにまかりて、かへりにけるに、しのふすりのかりきぬのはしをきりて、うたをかきて、女につかはしける かすかのゝわかむらさきのすり衣　しのふのみたれかきりしられす 業平集(六一～二) かすかのさとゝいふところにいきたりしに、いとよき女のありしかは、しのふすりのきぬをやるとて かすかのゝわかむらさきのすりころも　しのふのみたれかきりしられす 返し

みちのくのしのふもちすりたれゆへに　みたれそめにしわれならなくに

新古今集　十一　恋一　（九九四）

女につかはしける

かすか野のわかむらさきのすりころも　しのふのみたれかきりしられす　在原業平朝臣

古今集　十四　恋四（七三四）

たいしらす

かはらのひたりのおほひまうちきみ

みちのくのしのふもちすりたれゆへに　みたれむとおもふわれならなくに

古今六帖　五　すりころも（三四一五八）

みちのくのしのふもちすりたれゆへに　みたれそめにしわれならなくに

業平集（六三）　1の項参照

1附

二

2

古今集　十三　恋三（六二六）

やよひのついたちにしのひに人にものらいひてのち、あめのそほふりたりけるによみてつかはしける

おきもせすねもせてよるをあかしては　はるのものとてなかめくらしつ　ありはらの業平朝臣

新撰集　四　恋雑（二四四）

おきもせすねもせてよるをあかしては　春の物とてなかめくらしつ　在原業平朝臣

古今六帖　一　あめ（三一三三五）

おきもせすねもせてよるをあかしては　春のものとてなかめくらしつ　なりひら

古今六帖　五　あした（三三四三九）

なりひら

をきもせすねもせてよるをあかしては　はるのものとてなかめくらしつ

在中将集（七）

やよひのついたちころ、雨ふる日、人の許に

おきもせすねもせてよるをあかしては　はるのものとてなかめくらしつ

業平集（吾三）

ある女の、この京にありしに、やよひのついたちのころ、あめふりしにやりし

おきもせすねもせて（す）よるをあかしては　はるのものとてなかめくらしつ

『伊勢』第二段「おきもせず」の歌は、『古今』十三　恋三　の歌で、竹岡正夫氏（『伊勢物語全評釈』右文書院）が指摘されるように、「古今集の部立てでは、恋三の初めは、古来説かれているように「会而不逢恋（あひてあはざる）」に相当する」（82頁）歌である。この歌は、藤岡忠美氏（鑑賞日本の古典4『伊勢物語・竹取物語・宇津保物語』尚学図書）が指摘されるように、解釈が二つに分かれる。氏は、

男が「起きもせず寝もせで夜を明かし」たのは、女の家において過ごした一夜のことであったのか、それとも、女の家から帰って何日か過ぎたときの男の家におけることだったのかということである。（32頁）

とされ、「前者ならば翌日に女に贈った後朝の歌にあたるし、後者ならば女に逢えぬ男の悶々としたもの思いということになる。」といわれる。ひと続きの論述であるが、後半部には問題があり、再検討を加えなければならない。だが前半部の「女の家」「男の家」という二つの解釈は、竹岡正夫氏の『全評釈』「古注釈十一種集成」や鎌田正兼氏の『考証伊勢物語』（名著刊行会）などによって、古注釈の時代から既に存在していたことがわかる。『知顕集』は、「はるのよは、さらぬだにあけやすきに、さばかりこゝろをつくして思ふ人にはじめてあ逢いぬれば、あくるほどもなし。おきて

あかしつるやらん、ねてあかしつるやらん、あもひわかぬほど、はかなきをよめり」（『全評釈』89頁）と「女の家」とする。契沖の『勢語臆断』は、

日をへて後遣はす心ならば、人を思ひてぬるともなく、おくるともなくてよるはなげきあかし、ひるはまた春の物とてつくづくとうちながめて長き日を暮しかぬる心なり。詠に長雨をかねたり。帰りきて其日の暮などに遣はす心ならば、諸ともにこしかたの心づくしを語り、ゆく末を契りなどして、はかなき短夜は起ともなく、ぬるともなしにあけて帰りきて、ながき日の雨さへそほふるに、ひとりながめて暮しわぶる心なり。帰り来てと云るは、其日よみておくれるやうなれど、猶上句の心は後日に遣はせるにや。（同93頁）

と、「男の家」「女の家」の二つの解釈を示し、「男の家」ではないかとする。真渕の『伊勢物語古意』は、『臆断』の説を継承する。藤井高尚の『伊勢物語新釈』も「男の家」とする。そこには、「女の家」から「男の家」へと傾斜していく近世注釈史の方向を展望することができる。「男の家」とする注釈書を手もとにあるもののなかから分類整理して列挙する。

○藤井高尚『伊勢物語新釈』（日本図書センター）
○窪田空穂『伊勢物語評釈』（東京堂）
○大津有一『竹取物語　伊勢物語』日本古典鑑賞講座（角川書店）
○福井貞助『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』　日本古典文学全集　（小学館）
○阿部俊子『伊勢物語(上)　全訳注』　講談社学術文庫
○竹岡正夫『伊勢物語全評釈』古注釈十一種集成　（右文書院）

「女の家」とする注釈書には次のようなものがある。

○中村真一郎『竹取物語　伊勢物語　落窪物語』日本古典文庫7（河出書房新社）
○藤岡忠美『伊勢物語・竹取物語　宇津保物語』鑑賞日本の古典4（尚学図書）
○渡辺実『伊勢物語』新潮日本古典集成

大津有一・築島裕校注の岩波『日本古典文学大系』は、「補注」で「どちらでも通ずるようである」（190頁）とする。物語章段の成立と構成、主題に関わりあいながら、諸説帰する所を知らない現状であるが、藤岡忠美、渡辺実両氏の発言や別冊国文学No.34「竹取物語　伊勢物語必携」（学燈社）の増田繁夫氏らの立論は注意すべきであり、「女の家」のことと解すべき方向に大きく傾いてきているように思われる。

新潮『集成』附録の「伊勢物語和歌綜覧」によって、詞書と和歌との関係を、その表現する意味、成文の順序という視点から分析・分類していくと次のように考えられる。「おきもせず」の歌の解釈には問題があるが、この歌が〈恋〉〈雨〉〈恋〉という意味成分の順序をもって表現されているという点では共通しているように思われる。次に、詞書きをその表現する意味成分の順序という視点から構成的に単純化して示すと次のようになる。「綜覧」の配列順序により、略号で示す。

○古今　〈やよいのついたち〉（〈忍びに〉〈恋〉）〈雨〉〈恋〉
○新　撰　〈恋〉
○六帖　一　〈あめ〉
○六帖　五　〈あした〉
○在中将　〈やよいのついたち〉〈雨〉〈恋〉
○業　平　〈この京〉〈やよいのついたち〉〈雨〉〈恋〉

『伊勢』をこうした方法で単純化すると、〈奈良の京・この京〉〈西の京〉〈かたちよりは心なむまさり〉〈ひとりのみにもあらざりけらし〉〈まめ男〉〈恋〉〈やよひのついたち〉〈雨〉〈恋〉という構成になっている。「歌」の構成に最も近いのは『古今集』の詞書きで、〈恋〉〈雨〉〈恋〉という形で終っている。ところが、〈やよひのついたち〉〈雨〉〈恋〉という形で終っているのは『在中将集』『業平集』『伊勢物語』である。増田氏などが指摘されるように、「本文もすべてほぼ現存の形であったのかという問題」（別冊国文学No.34・117頁）はあるが、一つの前提に立てば、詞書きや地の文章の表現する意味成分の順序を構成的に考えるという視点からは、そのような親疎の関係を指摘することができるように思われる。片桐洋一氏が指摘されるように第二段の成立関係を「伊勢→古今」という形で捉えることは困難である。増田氏は『古今集』の詞書きに「西の京」がふれられていないのは、片桐氏の指摘されるような成立関係を考える上で「不審の残る点」だと指摘されている。『伊勢』の詞書きが表現する意味成分が九個の要素を持つのに『古今集』は五個に過ぎず、しかも表現の順序が『在中将集』や『業平集』とは位相を異にする。さらに「歌」と詞書きの表わす意味成分の順序が整合し、対応する。そうした位相をもつ『古今集』の成立関係を片桐氏のような形で捉えることはできない。『六帖』「五　あした」は「雑思」の部の歌で、「四」の「恋」の部の歌ではない。だが「くさぐさのおもひ」には、恋の歌がほとんどであるように思われる。それは「四」の恋の部のなかに「祝」「別」の部や「ながうた」などを包含する多様さをもつのと一般であり、「四」もまた「服飾」「色」などの部をもっている。「あした」の歌は『新編　国歌大観』本によれば、二五八六番歌「けさはしも」から二五九八番歌「あひみての」の歌まで十三首である。「こひし」の語をもつ歌六首、「おもひ」「わびし」「はかなし」「ながめ」「みまくほし」「くれまつ」「あひみて」の語をもつ歌それぞれ一首、いずれも恋の思いを詠んだ歌である。会うて後「あした」の恋の思いの種々相を歌い、後朝の歌と解される歌も何首か見られる。藤岡忠美氏（『鑑賞　日本の古典　4』尚学図書）は、

やはり、二人の間には睦まじい語らい以上のものがあり、夢うつつの逢瀬のあったことが述べられ、うたわれていると考えたい。「起きもせず寝もせで夜を明かしては」という詠みぶりは、第六十九段で狩の使いとして来た男と一夜の逢瀬をすごした伊勢斎宮が、翌朝男におくってきた歌、

君や来し我や行きけむおもほえず夢かうつつか寝てか覚めてか

の下句「夢かうつつか寝てか覚めてか」と、同趣の表現といえよう。逢いがたい関係の男女がようやくにして逢いえた無我夢中の心境が、こうしたさだかな記憶さえ欠く陶酔感の表現をとらせることになる。第六十九段の場合も、斎宮の身にとってのいわば「禁じられた恋」だったのであり、この段の女にしても、「ひとりのみもあらざりけらし」という制約がすでにあったし、その制約にもかかわらぬ男の情熱的な行動にたいして、作者は「いかが思ひけむ」という讃嘆をこめた驚きさえ発している。だから、ようやくにしてかなった恋の一夜が明けてもいまだに呆然とした男の心境が、後朝の歌として女のもとに届けられたものと解することができるのである。

こう考えてみると、とくに「起きもせず寝もせで」の表現を、「夢かうつつか寝てか覚めてか」と同趣の類歌的詠法ととらえるならば、これを男ひとりの懊悩の明け暮れと解する必要は、ことさらないように思われる。（34頁）と指摘されている。藤岡氏は、さらに『伊勢』と『古今集』詞書きの表現上の対応関係に注意され、『古今集』の詞書きは『伊勢』を「そのまま縮約した態になり、歌意に相違をきたすことは特にあり得ないかに見える」（同、35頁）とされながら、この歌が『古今集』恋三の巻頭歌として「逢わぬ恋」の詠歌である問題に論及されている。氏は、「多様な解釈を成り立たせる問題が生じてくるのは、詞書きと和歌、地の文と和歌との関係を、密接一体のものとしてとらえるところに発すると思われる。この関係に対して疑念をいだくことは、この和歌説話の成立事情をときほぐすのに役立つことになろう」（同、35頁）と指摘される。藤岡氏のこの論点は示唆的であり、容認すべきである。従来、歌と詞書

き、歌と地の文との比較は、内容的な類似性や、表現上の対応関係に重点が置かれてなされてきたが、表現上の意味成分の構成意識とその表現の順序という構文上の論点は、勅撰集の詞書きと私家集や歌物語の詞書きや地の文、歌語りという諸相のなかで再検討を加えられなければならない視点のように思われる。藤岡氏が、この歌を「無我夢中で一夜をすごしたのち、「春のものとてながめ暮らしつ」」と「日暮れになるまでの時間」を詠んでいる点に、「暮れをむかえてしまったことへの詠嘆からして、長雨のために、日暮れても相逢ことのできない嘆きをむしろ詠みこんだ後朝の歌であった」（同、38頁）と解されたのは注意すべき論点をもっているように思われる。

既に指摘したように片桐洋一氏は、この歌を「伊勢→古今」という成立関係のなかに捉えられ、

物越しに対面しただけで容貌も確かめ得なかったのに、その女の心深さに感激し傾倒してしまう「まめ男」。その女に夫がいて、ために結果がどうなるということなどは考えもしない。夢うつつの状態で一夜を過ごした後、帰宅してもその余韻の中に春の長雨を眺めつつ一日中物思いにひたってしまう若き男。ようやく夕刻近くなって、やっと我を取り戻して、昨夜あたかも愛の契りがあったかのごとく後朝の歌を贈る主人公。まさに少年の日にのみ許された、切なくも純粋なプラトニック・ラブの物語である。（前掲、『新研究』156頁）

とされ、「簾越しの一夜の物言いにすっかり感激し切った男」の姿を読みとられている。片桐氏の論を踏える吉田達氏（『伊勢物語・大和物語　その心とかたち』九州大学出版会）は、「「昔男」の世づかない心の側に立って、そこにこそ偽りない若者の恋の真情を認め、一夜の恋のほとぼりの中に呆然自失しながら時を忘れ、魂を揺曳させていたその男の姿をよしとしていた」（82頁）と指摘される。しかし、既に増田繁氏（前掲、別冊国文学№34）が指摘されているように、「ながめ」の語に「感激」といった「肯定的積極的な感情」を読みとることはできない。氏が指摘されるように「憂愁懊悩」の心情の世界を読みとるべきである。『後撰集』巻第四、一八二番に次のような歌がある。

さみだれにながめくらせる月なればさやにも見えず雲がくれつゝ　（片桐洋一校注『後撰和歌集』岩波「新　古典文学大系」58頁）

この歌は、詞書きによると藤原定方が少将であった時、ひそかに通っていた女性がいて、既に疎遠になりはじめていた。長雨がすこしやんで、月がおぼろの頃、殿上人五、六人がその女性のもとに「酒たうべむとて、押し入」ったが、定方は不在、「あるじ出せ」など、「たはぶれ」る。そこで件の女性が詠んだ歌ということになっている。殿上人達の酔乱の一興のなかで詠まれたこの歌にも、「五月雨の中、物思いにふけりながら一日を暮らした夜の月ですから」と、やはり待つ身の憂愁の想いが揺曳している。この語には、語誌的に民俗信仰をその背後にもつ掛詞として用いられてきた長い歴史が存在していたことを注意する必要がある。

さらに増田氏（前掲、別冊国文学No.34）は、

『伊勢物語』には「まめ男」の用例は他になく、「まめ」の語も三例ほどで、そのうち二例は第六〇段の「花橘」の歌の話、一例は第一〇三段の「昔男ありけり。いとまめにじちょうにて、あだなる心なかりけり」である。「まめ」とはこの例に見えるごとく「あだ」に対する語であり、当時の用例をあげる余裕はないが、『源氏物語』の夕霧や薫のごとく穏やかさや持続する心といった属性をもつもので、むしろ「いちはやきみやび」のような傾向とは対立するごとく思われる。（117頁）

と指摘され、「作品として考えた時には第二段に「かのまめ男」の語の出てくることには無理があると考えざるを得ない。」「第二段が初段と緊密に対応して構成されているのは全体として認められるにしても、「かのまめ男」の語をもつことで、この位置に収まりきってはいないように見える点も、章段の排列の問題として、もと他の位置にあったのが第二段に移されたという痕跡を示すものと考えることはできないであろうか。」と、問題を提起し、論述されている。

『色葉字類抄』は「真成」「実為」などに「マメヤカニ」の訓を当てる。『日本語大辞典』（小学館）は「まめ（忠実・実）（形動）」の見出し語に、「(1)マミ（真実）の転」「マミアエ（真実肖）の義」以下「(9)」までの語源説を付記する。語意は四つの意味に分類して次のように示す。「(1)まじめであるさま。誠実でうわついたところのないさま。」「(2)実際の役に立つさま。生活に直接かかわって実用向であるさま。」「(3)勤勉でよく働くさま。几帳面（きちょうめん）なさま。」「(4)からだが丈夫なさま。すこやかであるさま。達者。」

『伊勢』の「まめ」の用例として挙げられる次の語は、いずれも「(1)」の意味で用いられている。

(1)それをかのまめ男、うち物語らひて（二段）＜小学館『全集』134頁＞

(2)宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、（六十段）＜181頁＞

(3)いとまめにじちょうにて、あだなる心なかりけり。（百三段）＜222頁＞

だが、物語の用語意識にはそうした辞書的な意味を踏えながら、それとは違う、また別の意味を操ろうとする意識が働いていたのではないかと思われもする。竹岡氏が『全評釈』（右文書院）で挙げられる『古今集』巻十九の誹諧歌「まめなれど何ぞはよけく刈萱の乱れてあれど悪しけくもなし」にしても、増田氏が『伊勢』百三段の用例で示される例にしても、いずれも「まめ」は「あだ」に対する語であることは疑うべくもない。だが、宮仕えが忙しく、男の心もまたひたすらな、精いっぱいな愛の誠意を傾けかねている間に、家あるじの女は、愛の誠意を尽くそうという男について地方へ下っていってしまう。『伊勢』六十段の物語の結末は、確かに悲劇的で残酷な趣きがないわけではない。男の身勝手と女をもて遊ぶ傲慢さが、女を出家へと駆り立てていく、救いようのないある暗さが描き尽くされているようにも読める。現代のわれわれは、自分達の人生の経験を通して、文学のそういう読み方に慣れてしまっているように思われる。だが、女あるじ――だから「家刀自」でなければならなかったのだ――が「まれびと」の饗宴に侍る古い話型からの創

作意識をこの章段にからませて享受すれば、また文学の別の世界を読み解いていくことができよう。そうした物語りの「方法」とは別に、『伊勢』の作者は、現世的、世俗的な意味での愛の誠実を越えた世界に、男女の「愛の誠実」、「恋のまことの趣き」を志向していたのではなかったか。この章段の「女」と「男」の生き方のなかには、そういう心の違いのありようを語っているように見える。こういう言い方は、性の差別を伴うように理解されるかも知れない。だが、それは人間の生き方としての現実的なるものと、夢やロマンなるもの、と言い換えることができるものでもある。それは女と男とが、生きるより拠を異にし、孤独な存在でありながらも、なお同じ時と場に生きなければならないという一つの矛盾、苦悩、乗離の世界を人生の断層として非情なまでにえぐり出しているように思われる。つまり、女の求め続けてきた「愛の誠実」さが、色好みの愛のモラルという物語の創作的、主題的「方法」から否定されていく姿を、そこに描き出している。それは無論、逆説的により高い次元の男女の愛の世界の同一性を示そうとする営みでもあったのだが。

『伊勢』百三段「(3)」について、改めて全文を示す。

むかし、男ありけり。いとまめにじちようにて、あだなる心なかりけり。深草の帝になむ仕うまつりける。心あやまりやしたりけむ、親王たちのつかひたまひける人をあひいへりける。さて、

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

となむよみてやりける、さる歌のきたなげさよ。

『新釈』（藤井高尚）は、

まめなる男の、親王たちのつかひ給ふ女にものいふは、あるまじき事なれば、かくいへる也。さて、此の段は、「ねぬるよの」と、云ふ歌のせちなる情をふかめんとて、まめなる男の、いといとあひがたき女にあへるよしにはい

ふにぞありける。まめ人の心あやまりしてものいふばかりなれば、いたくすぐれたる女なるべく、さるからにふかく心とまりて、「夢をはかなみまどろめば」とは、いへるよしにつくりなしたる也。此の心ばへを、むかしより見しれる人なかりしかば、注ども、みなおろそか也。（前掲書、275頁）

と注記する。「……とは、いへるよしにつくりなしたる」というのである。さらに、

〔歌のきたなげさよ〕と、いへるを、「自記の詞にて、卑下していへるなり」と、拾穂・臆断にとけるは、古意にさだめいはれたるごとく、あやまり也。されど、「きたなしとは、歌をいへるにはあらず。まめ人のかくおもひみだれたるよしの歌よみてやるは、心きたなしと云ふ意也」と、おなじ書にとかれたるは、いみじきしひ言也。戯にみだるゝ心をきたなしといはんは、さらに此の物語のこころにあらざるうへに、「歌の」と、いへるを、いかでか歌にあらずとせん。これは、いといとをかしき歌なれば、記者の、わざとうらをいひて「きたなげさよ」と、いひたはぶれたる詞と見るべし。（同、276頁）

と指摘している。小学館『全集』の頭注は「歌の作者が自ら卑下しているような書き方」（223頁）とし、新潮社『集成』の頭注は、

『古今集』も載せる業平の歌だが、この段の「きたなげさよ」という露骨な悪口については、語り手としての業平が自ら卑下した言葉だ、と言われている。おそらくはそうであろうが、「心あやまりやしたりけむ」という言葉といい、「親王たちの使ひ給ひける」女と関係を持ったことについての、とがめ立てのようなものを、示しておきたかったのかとも想像される。（120頁）

と注記する。山田清一氏（『伊勢物語の成立と伝本の研究』桜楓社）は、「「さる歌のきたなげさよ」という本文は、広本系諸本、朱雀院塗籠本等には存在せず、よって後世の附載と考えられる」（597頁）と指摘されている。『全集』

『集成』など、最近の注釈書はさすがに藤井高尚の『新釈』の説は否定している。石田穣二氏（『新版伊勢物語』角川文庫）の「未練がましいという程の意」を踏えられたものかと推定される竹岡正夫氏は、「未練たっぷりの、思い切りの悪さよ。」（『評釈』1420頁）と解される。そして、

交合の後の男の空しさを主題にした、当時珍しい短編となっていて、興味深い。それを、はかない、はかないと、いかにも思い切り悪く未練ありげに歌っているので、きたなしと批評したのである。諸注、この一段の主題がまるで読み取れていないと思う。（同、1424頁）

と、指摘されている。

『伊勢』の章段構成が、その主題、方法との関わりにおいて群を形成するものであること、対偶的に構成されているいくつかの章段が存すること、などについては既に指摘されているごとくである。百三段は、百一段、百二段、更に斎宮との物語という内容の上では百四段まで、一群を構成する章段であるが、成立、主題という論点では一貫性を欠く面もある。しかし、百三段の「さる歌のきたなげさよ」という文の意味は、百一段の「あるじのはらからなる、あるじしたまふと聞きて来たりければ、とらへてよませける。もとより歌のことはしらざりければ、すまひけれど……「などかくしもよむ」といひければ、……みな人、そしらずなりにけり。」（『全集』221頁）。第百二段の「むかし、男ありけり。歌はよまざりけれど、世の中を思ひしりたりけり。」（同、221頁）とある部分と対応して考えなければならない。百一段、百二段の「歌のことはしらざりければ」、「歌はよまざりけれど」というのは、竹岡氏が『評釈』でいわれるように、「「翁」役を演じて祝儀の歌を詠む虚構で、詠んだ歌が問題を含み」「その作意を男に問いたださなくては納得できないような歌を詠むという話への伏線」（1403頁）であり、「詠んだこともない和歌を一所懸命に作って、何とか慰めてやろうと、真情あふれる歌を詠んでわざわざ贈ってやった」（1413頁）という点も見られないわけでない

が、小学館『全集』頭注に「前段の「歌のことはしらざりければ」と同じような表現法」（222頁）、新潮社『集成』頭注に「百一段と同じく、わざと反対に言ったもので、かえって業平を思わせる書き方」（119頁）とあるように、対応する表現と考える論点に立つことが必要である。対応し、対偶する表現として捉えることは、この二段の表現を必然的に逆説的な表現として解していくことになる。そして、続く百三段は、歌を詠んでやったことはやったけれども、「さる歌のきたなげさよ」というのである。百三段をこのように先行する百一段、百二段の表現上の同一延長線上に捉えると、藤井高尚の『新釈』の説が再浮上してくる。しかし「心あやまりやしたりけむ、親王たちのつかひたまひける人をあひいへりける。」という物語からは、やはり無理があるだろう。だが、「歌のことはしらざりければ」「歌はよまざりければ」「さる歌のきたなげさよ」という、百一段から百三段に至る表現の基層には一貫して流れる主題性、構成意識が存在すると考えなければならないように思う。そういう視座から百三段を読んでいくと、そこには、六十段で考えたと同じような視点の物語的世界が、展開しているように思われる。

「いとまめにじちようにて、あだなる心なかりけ」る男も、時によってふと誤をおかすことがある。「まめにじちよう」なることと、「あだなる心」とは、善悪や正邪の別というような二律背反的存在として捉え難いものではないか。そうしたものが、激しくせめぎ合う潮騒のなかに踏みこらえ、とどまろうとしながら、崩壊へと傾斜していく不条理のなかに生きていく姿、そういう苦悩、懊悩のなかにこそ、人間のかなしさ、いとおしさがあるのではないか。気品高く、誇りかに生きる人間の生き方は、文学の世界とはおそらく無縁なのである。文学の根源には、やはり一つの浄化（カタルシス）が存在する。『伊勢』は、そういう読まれ方にたえ得る作品としてつくられ、享受されてきた物語であったように思う。そういう「昔男」、主人公の生き方を語る文学であったというべきだろう。百三段の「昔男」は、「親王たちの使ひ給ひける」女と関係を持ってしまった、だが、そのことが罪悪観、倫理観として許し難い「あだなる心」として否定されてい

ると考えるのは、婚外交渉を良俗秩序に反するものとする現代人のとらわれた一つの見方に過ぎない。そういう見方からは、『源氏物語』第一部の物語世界を読み解いくいくこともできないように思う。

「歌のことはしらざりければ」、「歌はよまざりければ」、だから歌を詠んでも、「きたなげさよ」ということになる。一群の物語を表現上の同一延長線上に捉えていくと、『新釈』の「わざとうらをいひて」「いひたはぶれた」という、逆説的な意味がよみがえってくる。だが、そこには物語の文脈から無理があるように思われることは指摘したごとくである。「いとまめにじちよう」なる男なるがゆえに、かえって「心あやまり」をついしてしまう事にもなるのだ。人はそういうあやにくな癖をもっている。それにしても、「寝ぬる夜の」の歌は全く始末の悪い歌になってしまっている。女と契ってしまったことを「寝ぬる」「まどろむ」という詞ではっきりと言い切っているからである。『源氏』で、女三宮にあてた柏木の消息文を見た光源氏は、二人の関係が第三者に明確にわかってしまう書きぶりを咎めている。誰の目にとまるかも知れぬ艶書をそんな風に書くものではないと教えている。この歌は女人へのいたわり、思いやりを全く欠落させてしまっている。「まめにじちよう」なる「昔男」は、実はそういう反面をも持っていたのである。物語末尾の露骨なまでの悪口は、確かに「語り手としての業平が自ら卑下した言葉」には違いないが、女人へのいたわり、思いやりを全く欠落させてしまっていることへの評語――草子地に近いものでもある。そのことは百一、百二段など隣接する章段の末尾の文が果たしている役割との対応関係からも明らかである。竹岡正夫氏らが指摘されるように、思い切りの悪い、未練ありげな歌への評語であるとは、とうてい考えることはできない。

山下真弓氏（「まめ」「まめやか」について――意味変遷と「みやび」との関係――」『立教大学日本文学』39　昭52・12）は、第二段の「まめ男」を「全身を賭けた恋をする」「恋に対して真剣な男」とし、「起きもせず寝もせで夜をあかす」のは、「初々しい恋をする」ことだと解されているが、第百三段の歌の内容との関わりで「まめ男」の意味

を考えていくと、やはりそうではあるまい。女のもとで、「おきもせず寝もせで夜を明かす」ことは、既に長文を引用して掲げたことではあるが、藤岡忠美氏が指摘されるように、第六九段の「夢かうつつか寝てかさめてか」と同趣の類歌的詠法だと捉えるべきであろう。これらの歌は、男女の関係のありようを当事者以外にはその真相がわかりにくいように詠んでいるという点で共通している。やはり、同趣の類歌的詠法なのである。そして、これらの歌の発想は、百三段の歌とは違う、対峙する次元を持っている。そこには、いたわり、思いやりのなかに、事の真相を朧化していくという意識が存在する。滝瀬爵克氏（『伊勢物語文学の世界』古川書店）も次にように指摘されている。

「「もののあはれしる心ばへ」、つまり、「みやび」な情趣をよく解する優雅な心の持主の女ということであり、そのような「みやび」な心をもって、いちはやく感じとる気のきいた「なさけぶか」い心づかいや気配りが、昔男の心をとらえずにはおかなかったばかりではなく、彼を「まめ男」といっているように、彼女に対して誠実で実直な男にまでさせていったのでもあるのだ。（18頁）

大野幸子氏（「源氏物語「まめ」に関して」『高知女子大国文』　3　昭42・8）は、源氏物語に用いられている「まめ」について

感情的とはならず、常に理性的である。そこには冷静に判断するところから、真剣さも感じられる。そしてあまりにも理性的であるために、異常が生じ、それに対する驚異も生じてくる。しかし一般には「まめ」は驚異よりも、賞賛の目で見られたり、あるいは無骨者とけなされたりする。「まめ」を「理性の強い意識」――逆に言えば「感情的でない意識」と言えようが――と解してこそ、源氏物語の中での「まめ」の働きが正しく理解できると思う。そこには理性的であろうとしつつも、完全に「まめ」とはなれず煩悩する、生き生きとした人間が生み出されていると思う。（39頁）

と指摘され、用例を検討されている。『源氏』の用例としては、確かにそういう面が強く表われてもいるが、山下真弓氏（前掲論文）は、「まめ」「まめやか」の分布状況を索引類を用いて調査され、『伊勢』から『大鏡』に至る一八の作品と『讃岐典侍日記』を付記して、それらを三期に分類して意味の変遷をたどられている。山下氏は、前期の作品として『伊勢』『大和』『多武峯少将』『蜻蛉』『宇津保』の五作品をあげ、特に『伊勢』だけを「初期」とし、特定して論述されている。氏によれば、『色葉字類抄』など、辞書類に当てはめられた漢字を見ると、「「まめ」の語感には精神的緊張感が感じられる」という。氏は、

「まめ」、特に「まめやか」は意味が多岐に亙っているが、本文にあたる指標として便宜上、項目を設定することとし、設定にあたっては『岩波古語辞典』等の四項目分類を基にした。

とされ、

①真面目（心から、誠意を持って、誠実）

a　真面目

b　真面目そうに

②実際（ほんとうに、ほんとうは、実際のところ、実は）

③忠実（怠りなく、丁寧に、熱心に、畏まって、居住居を正して）

④対「風流」（経済上のたすけ、実用向きの、無風流、真面目ぶった、生真面目な、几帳面な）

に分類される。そして、

①のaとbは、「まめ」「まめやか」が修飾している言動の主体が相手もしくは第三者にどう見えるかで分けた。「まじめそのもの」で風雅を全く解し得ないと第三者の目にうつる場合、「真面目ぶって」いるとかなり強い否定

的判断が下されるが、これは④に属す。

②のうち「まめやかには。」というように提題の助詞「は」が付いた語は、すべて「実際のところ」「ほんとうは」と訳すことにした。

とされ、さらに「この四項目のいずれにも該当しないもので、雪や雨が「まめやかに降る」等の例がある。「本格的に」という意味であろう。」（29頁）と指摘され、諸作品の用例について具体的に検討し、意味を分類されている。氏は「初期」を『伊勢』に限定し、四例の「まめ」について、

「みやび」の体現者としての昔男を「まめ男」の名で呼ぶように、ここで用いられた「まめ」は①aと③の意味、すなわちこの男の「誠実さ」を表す語である。

しかしこの「まめ」も前期の『蜻蛉日記』をみるに及んで「誠実」の意から離れ、かなり否定的な意味に用いられていることがわかる。（同、）

と、指摘されている。これらの指摘は一面では妥当性をもっているが、反面では微妙な用語意識によって操られる物語の影の世界を読み得ていないように思われる。既に指摘したように、『伊勢』六十段、百三段の「まめ」の用例には、そうした捉え方では捉えきれない用語意識が存在する。そのように第二段の語意と対峙する用語意識を読み解いていくことのなかに、物語享受の一つのたのしみがあったように思う。

Ⅱ

「春日の里」から「西の京」へと展開する『伊勢』の方法には、片桐洋一氏や増田繁夫氏が指摘されるような成立論上の問題がある。増田氏は、「作品として考えた時には第二段に「かのまめ男」の語が出てくることに無理があるこ

と、全体として「第二段が初段と緊密に対応して構成されている」ことは認められるにしても、「「かのまめ男」の語をもつことで、この位置に収まりきってはいないように見える」といわれる。しかし、山下真弓氏（前掲、「「まめ」「まめやか」について」）が指摘されるように「「まめ」は「みやび」を支える土台である」（37頁）とし、

生活の情趣化を目差す平安朝の美的生活への意志は、「みやび」の世界を一定の価値規範のもとに拡大させた。それに伴って「まめ」の世界は「みやび」の世界へ吸収される部分を生じつつも、「みやび」の世界にある色好みの概念から剥離していった。（同）

と考え、歌語りの噂さの主のあの「まめ男」と解すれば、「この位置に収まりきってはいない」と強いて考える必要もない。『伊勢』の「かの」の語例を検討することも大切なことではあるが、田村俊介氏（平成二年度　中古文学会秋季大会宮城学院女子大での口頭発表。但し異文の存在を考慮されなかったところに問題がある）が指摘されるように、『源氏』の「「かの」の下には人物呼称がよく来る」という、「かの十六夜の女君」のような用法は、『伊勢』のこうした用例と深く関わる。こういう用法が慣用化されていった歌物語の伝統・歴史的プロセスを通して確立していった表現だと考えなければならない。従来の諸説は、『伊勢』の語例にとらわれ過ぎ、諸説入り乱れていたように思う。『伊勢』の第二段が、比較的早い時期に第一段に並置されていたものと考え、同じ次元のなかで捉えていくと、対偶的に見事に構成されている物語であることに気づく。

『源氏』の巻名が、対偶的に構成されていることを指摘されたのは武田祐吉博士（「源氏物語に於ける対偶意識」有精堂　日本文学研究資料叢書『源氏物語　1』）である。筆者も「葵・賢木・花散里」（有精堂　源氏物語講座　第三巻）・「葵・賢木・花散里の巻と物語の構成」（『源氏物語とその周辺』伊那毎日新聞社）などで論じたことがある。紫式部の見た『伊勢』のテキストが、現存する初冠本の形態に近く、第一、二段が並置されていたとすることには疑問

があるようにも思われる。しかし、『伊勢』章段を構成する美意識に対偶的意識が大きく働いていたことは、事実として認めなければならない。『伊勢』を読み親しんでいた『源氏』の作者は、自らの作品のなかで『伊勢』の方法を随所に生かし、活用していこうとしているように思われる。「桐壺」「帚木」というような対偶的な巻名も、あるいは『伊勢』から学び得た、時代の思潮としての一つの美意識であったようにも思われる。

塚原鉄雄氏（『伊勢物語の章段構成』新典社）は、「第一段の記述と第二段の記述とは、対照的な対応関係を、多様に具有する。」（62頁）とされ、両段の「主題が、貴族圏外に居住する卑賤の女性を対象とする情事ということで、統合しうる」として、「伊勢物語の発端章段と仮称」（64頁）し、以下の四段を「高子章段」とされる。そして、「発端章段と高子章段とは、好色による人間性の回復がその徹底を追求することによって、粉砕され破滅したことを、いわば具体的に論証した」、「体制的制約の限界を」「逸脱することによって、挫折する」といわれ、

挫折するけれども、逸脱を放棄しなかったのが、伊勢物語である。社会的体制の制約に挫折した「をとこ」は、地域的断絶を超越する人間的結合を、東方において実現しようとする。だが、そこでも、また、好色の挫折と人間の疎外とを回避しえない（同、83頁）

と、指摘され、「作者の思想は、愛情行為を媒介として、人間の究極的な孤独を認識するということであった。」（同、344頁）と結論づけられている。

片桐洋一氏（伊勢物語の新研究』明治書院）は、第一段・二段・三段について、

成立の次元は違っても、そこに描かれているのは、いずれも通俗的な常識や世間的な打算に背を向け、純粋無垢な愛のみを志向している一途な男の生きざまである。別の言葉で言えば、俗を否定し、雅を求める精神によって貫かれている（156頁）

とされ、『伊勢』を貫くものは「みやび」であり、「「みやび」は「閑」であり「雅」であった。名利を離れ門を閉ざしてひたすらに心を澄ませることであり、俗を棄てて正道を貫く純粋さである」、「「伊勢物語」の文学の方法は、過ぎ去るものを惜しみ、失われた時を求める心の表現である。」と指摘されている。滝瀬爵克氏（『伊勢物語文学の世界』古川書房）によれば、初段の主題の「みやび」が、「伊勢物語をつらぬいているもの」であることを「はじめて」「明らかにした」のは氏であり、昭和三十一年九月の「文学」誌上に発表した論文「伊勢物語をつらぬくもの――作者の意図を通して――」であるといわれる。氏は、

この物語の作者たちは、主観的には、矛盾したものまでも包摂して、それをも「みやび」としているようである。そのもっとも主要な矛盾は、作者たちが、前半部では積極的な激しい「いちはやきみやび」な説話を多くかき、後半部では、いわば風流な「みやび」の説話を書いていることである。つまり客観的には前半部と後半部の説話群の質的な相違が存在しているということである。（前掲書、66頁）

と指摘され、「「みやび」の由来とその展開」をたどり、

中国にならった都という都市空間のうちに生みだされた、貴族社会での風流事や好色事や反俗的で放縦な生活をたのしむ感性的な美意識であり、そこには、全人間的に生命を燃焼させて恋に殉じるような、粗野なはげしい意欲の発生する余地はなく、その母胎はむしろ民衆社会での民謡や民話や伝説などにみられるものであり、それを作者たちが歌語りの場に汲み上げ、そして文章化して「みやび」な歌物語につくりかえ、再生産していったものであろう。（同、67頁）

といわれる。福井貞助氏（『伊勢物語生成論』有精堂）は、第一・二段は、「奈良の京」という詞で連結され、二段は一段に「続けんとして構成された」もので、「この二章段は核と目してよい。」（215頁）と指摘されている。しかし、

これらの問題は、市原愿氏（『伊勢物語生成序説』明治書院）が指摘される次のような論点と深く関わる。氏が注として掲げた文献を本文中に括弧を用いて示し、引用する。

初冠の段の成立時期については、これを原初伊勢物語の成立時とされる福井貞助氏（『伊勢物語生成論』）や、四十一段の投影とされる片桐洋一氏（『伊勢物語の研究（研究篇）』）や、三元的成立論で第二次生成とされる辛島稔子氏（「伊勢物語の三元的成立の論」（『文学』昭三六・一〇月号）や、更に近時これを源融と、その友交サークルとの連関において論じようとされる渡辺実氏（「源融と伊勢物語」『国語と国文学』昭四七年一一月号）や原国人氏（「歌物語論への試み」『古代文化』昭四九年九月号）などもあって、この段の成立期に対する見解の振幅はかなり大きいといわなければならない。（38頁）

氏は、さらに、「現存定家本形態伊勢物語の初冠の段に見られる冒頭の不整合や欠陥は、伊勢物語が雑纂形態から類聚化へと物語的飛躍を遂げた時点における屈折と歪みの痕跡と見られる」と指摘されている。このような物語の生成論は避けて通ることのできない関門ではあるが、諸説の適否を検討し、その上に立って論証することは、またきわめて至難のわざといわなければならない。市原氏が指摘されるように「第一段の成立期に対する見解の振幅はかなり大きい」が、現存初冠本の形態に整理結集され、類聚的に、一代記風に享受され、読まれる方向をたどってきた、という事実を前提とする仮説に立つ論証も、やはり巨視的な論点に立つものとして、また必要であるように思う。ただ市原氏が推定されるように、「伊勢物語の主要章段は雑纂形態として、古今集以前に生成され」（278頁）たものと想定し、「雑纂的な原初伊勢物語が「をとこ」の一代記的に統一された下限」は、「延喜の後半から延長にかけて」（279頁）であり、「土佐日記に投影した伊勢物語一本は、時頼本と同系統の源流本」で、「源氏物語」「總角」の巻の時頼本関連記事が、時頼本の源流本を典拠としている」（280頁）とするならば、『源氏』の作者が見えていた『伊勢』は、「第二次伊勢物語」

として、「二十三段、二十四段、四十段など、かなり虚構性を有した章段をも包含したもの」であったと考えられる。氏は、「土佐日記から源氏物語への線上に時頼本の足跡を辿ることができる」（280頁）と推定されている。

原国人氏（『伊勢物語の原風景』有精堂）は、「融と藤原氏との軋轢・藤原氏への強い不満が、初段のモティフと根源的な部分でつながっている」（65頁）と指摘されているが、この論点は、『伊勢』百一段の「咲く花に下にかくるる人を多みありしにまさる藤のかげかも」や九七段の「さくら花散り交ひ曇れ老いらくの来むといふなる道まがふがに」などの歌に見られる「きわどい歌」（新潮社『集成』115頁）との関係のなかで据え直して考えてみなければならない問題である。吉田達氏（『伊勢物語・大和物語　その心とかたち』九州大学出版会）は、初段の冒頭部を読んだ平安初期の人々が「「春日斎宮」とそこに在った「酒人内親王」の面影」（3頁）をその脳裡に想起していたのではないかとされ、桓武天皇とその同母妹酒人との恋の伝承が、外孫――父系を辿れば曽孫――にあたる業平の俤の上に、「いや、業平らしき「昔男」の面影の上に向かってオーバーラップされた」（60頁）としても不自然ではない、と指摘される。初段が既に、その底に「伊勢斎宮」の面影を秘めていたとする氏の指摘は『伊勢』題名考に新たな問題を投げかけるばかりではなく、春日神社――藤原氏という論点をずらしていくことにもなる。『伊勢』がプレテキストとして、桓武天皇と酒人内親王との恋の物語を一つの話型のようなものとしてもっていたと考えることは、あるいは自然なのかも知れない。全く否定すべき理由もないように思われる。吉田氏の論に立つと、津島佑子氏（古典の旅2『伊勢物語　土佐日記』講談社）が、奈良公園から、春日大社へまわり、「心を騒がせて、狩衣の裾をとつさに切り取り、歌を書いて渡した、というような牧歌的な雰囲気は到底、味えそうにない。けれども、「伊勢物語」の頃、すでに過去の場所となっていた奈良の都が、今に至るまでその地への郷愁を核にして残しているということは、改めて考えてみれば、かなり貴重なことなのにちがいない」（68頁）というような、従来定説化して考えられてきた文学の場についての通説は、再検討を加

えなければならないことになる。氏はまた、「京都に対するのとはまったくちがった郷愁と、さびしさも少し混じった安らぎを感じている。」といわれる。『伊勢』第一段、第二段には「奈良の京」という、古京への郷愁が、対藤氏意識、みやびへの美意識、みずみずしい恋の心情などととけあって、うつくしくも、かなしいまでの物語的世界がつむぎ出されている。「奈良の京」、「西の京」には、時の流れや体制、権力から取り残された家の女達、――それは貧しいには違いないけれども、過去の経済力や社会的地位に支えられた教養や知性を豊かに身につけ、決して卑賤な女達ではなかった――が住んでいた。それは『源氏』の帚木巻に書かれている、物語に語られる魅力ある女性の登場が期待される世界でもあったが、それはまた、疎外された孤独な「昔男」の生きる世界とも重なるという二重の構造をもつ物語的空間でもあった。在原業平像には、原国人氏などが指摘されるように、確かに「身をえうなきものに思ひなす」疎外された人物、アウトサイダー、無用者などの人物像を揺曳している。しかし、「思ひなす」は、小学館『全集』の頭注などに、「……と思いこむ、そう思ってしまう、の意で、男の消沈したさまを示す。」（141頁）とあるのは一面的な読みと言えないだろうか。そういう意識的、意図的な表現のなかに、居直りの逆説的な心理がその裏側に隠されているのではないか、すくなくともストレートではなく、屈折した逆説表現であると理解すべきもののように思われる。『伊勢』は、そういう業平像を執拗なまでに追求していく一面をもっている。

『伊勢』第一段、二段には、「奈良の京」、「奈良の京ははなれ……西の京に」と、同質的、同次元的な対応、対偶のなかに、同時に微妙に異る異質、異次元的な物語的空間を構成する。そして、結局は異質、異次元の世界を注意深い対偶意識によって現出している。『源氏』の桐壺と帚木という対偶、そこには、やむごとなき宮廷に植えるられた高貴な桐と信濃路の伏屋に生うる卑賤な妖木という、異質、異次元の見事な対応が見られる。『源氏』が執筆され、巻名をつけ、巻序が整理されていく過程のなかで、『伊勢』の主題の方法と章段構成の方法とが、意識されなかったと考える

ことはできない。桐壺の帝が桐壺の更衣を、宮廷社会の愛の秩序、その掟に反して、一人の女性として執拗なまでに愛したこと、そこには、確かに長恨歌の世界を踏え、翻案にも近い表現意識が見られるが、桐壺の帝が生前に犯した罪として償わなければならないものでもあった。それはまた、攝関政治体制のなかで、藤氏の後宮社会にあらがう一面を持っていた。業平像は体制から脱落し、疎外されていく一面をもっていたが、桐壺の帝は、聖代意識という史眼によって的確に捉えられながら、反面では、そういう人物像として造形されている。『伊勢』と『源氏』とが、一面では同質的な、反藤氏という主題の方法を確立しようとする物語であったことは、やはり文学作品のもつ「浄化」作用をそのうちなるものとして秘めていたのである。これらの問題については、さらに稿を改めて考えてみたい。（未完）